

Title	星の名稱と傳説(一)
Author(s)	新村, 出
Citation	天界 = The heavens (1923), 3(27): 76-78
Issue Date	1923-02-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/159843
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

星の名稱と傳説(一)

文學博士 新村 出

日本在來の星の名稱や傳説は極めて少い。文學上の題材としても頗る貧弱であつた。これらの事は、明治三十三年八月號の言語雜誌の上に、私は「日本人の眼に映じたる星」を題して概要を述べたことがある。織女牽牛二星の話が支那傳來であるは勿論、五星のうち金星を除くこゝ、日本人の自然な命名を受け、又自然な感想諷詠の種子になつたものはなかつた。

ひこり金星は色々の名前が古來附いてをり、和歌俳句その他の韻文にも戯曲等にもあらはれて多くの人々の知る所である火星は、支那で熒惑といひ、それを日本で古音でケイコクミ呼んだが、和名では中世之れをヒナツボシ又ナツヒボシと唱へた。火の如く赤く、而して夏中に現はれるからには違ひないが、それよりも寧ろ支那の五行説に據つて天文家や陰陽家が稱へはじめたもので、民俗が自然の感想から命名したものではないらしい。近世の辭書に、又ホノホ星もあるのはよく分るが、アリカリボシともいふのは、何のこゝか知れない火星に關しては、日本に面白い傳説がある。然し日本人の間に自然に發生した昔話ではなくして、支那からもつて來て造

り附けた説話である。いづれも鎌倉時代以後の書物に見えてゐるので、古い國民傳説ではない。聖德太子傳曆によるこゝ、敏達天皇の九年六月にかういふ奇聞があるこゝ奏上したものがあつた。いま絶世の唱歌の名人に土師連八島(ヘノムラジヤ)といふ者がございまして、或る夜歌つてゐました所、何者こもしれず、それに和して非常な美聲で競ひ歌ふ人かございました、八島は不思議でたまらず、その相手を追跡してこゝうこゝう住吉の濱まで参りましたが、夜が明けてその怪しい歌ひ手は海の中に入つてしまひました。こゝ、かう奏上した。天皇のお側には聖德太子がおいでになり、「それは火星でございます」こゝ天皇に申上げられた。天皇は大にお驚きになつて、「それは一體何を言ふのだ」こゝお尋ねになつた。太子は更に申上げて言はれるのに、「天に五星があり五行を主ぎり五色を象ぎつて居りますが、熒惑は色が赤で南方の火を主ぎつて居ります、この火星は天降つて化して童子の間に遊び、歌謡を好み未然の事を歌ひます、」こゝ斯うお答へ申したさうである。扶桑略記にもこの事は出てをり、又夫木集にも載つてをる。夫木集によるこゝ、八島が詠つてゐる所に火星がそれに和するこゝ、八島は怪んで、誰だか名のれど歌で斯う尋ねる、

我宿のいらかに語る聲はたそ、たしかに名のれよもの草こも、

そこで火星は返歌をする、その歌は、

天の原南にすめる夏火星、豊聰トヨアキラに問へよもの草クサも、

さいふのである。豊聰トヨアキラといふのは、聖徳太子のこゝである。

おれは夏の夜る南の空に澄んでる火星ぢや、太子さまにお尋ね申せばわかるよ云ふ次第である。この話は申す迄もなく太子の聰明をあらはす爲の作り話であるが、希臘にでもありさうな趣味の深い物語である。河内國土師里の道明寺縁起には、この寺を推古天皇御願、聖徳太子開基とし、土師八島が勅を奉じてそれを造つたことあり、その由來に右の物語が出てゐる。以上の説話から夢想するに、火星は地球との通信といふこゝもいつか出來さうに思へるし、火星からエンジェルが天降つてくる日が、聖徳太子の千五百年忌か二千年忌あたりにはあるかも知れない。

それはさておき、太子傳説に關連して現はれた火星の唱歌といふ語の出所は、晋書天文志に、凡そ五星の精、地に降つて人となり、歳星（木星）は貴臣となり、熒惑（火星）は兒童となり、鎮星（土星）は人及び婦女となり、太白（金星）は壯夫となり、辰星（水星）は婦人となることあつて、兒童の火星は歌謠嬉戯を能くし、壯夫の金星は林麓に處ることを注してあるの由來する。誠に面白い對照、趣味ある表象であると思ふ。次に同じく作爲の跡があり支那傳來の痕が歴々たるのは、

丹後風土記に見える浦島傳説中に出て來る昂ホウの二星座である。丹後風土記は中世滅びた書であるが、鎌倉時代までは存在した。それが釋日本紀に引いてあるので斷片的に知られてゐる。而もその斷片は、比沼山の羽衣傳説だの、與謝の浦島傳説だの、面白い部分が残つたのはうれしい。それによるに、浦島が乙姫に引ばられて海中の龍宮の城門に到着した所で、乙姫が浦島を暫時門外に待たせて自分だけ内には入るに、やがて七人の童子が出て來て、これが龜姫さまの殿御だミコと話しあふかと思ふに、又今度は八人の童子が出て來て、これが龜姫さまの殿御だミコといひあふ。そこで浦島は、姫の名を龜姫カメノミコといふことを知る。するに姫が門内から出て來たので、浦島は童子たちの事を不思議がつて告げるに、姫七人の方は昂星ホウで、八人の方は畢生ヘイセイです、あなた惟んではいけませんに浦島にをしへる。これだけでこの星の話も童子のこゝも終つてゐるのは、物足りないが仕方がない。

昂ホウすなはちスバルは日本で中古印度の天文學書の宿曜經に従つて六星の數へ、近世は又之れをムツラボシ（六連星）と呼んだが、支那や西洋の天文學では、古くから七星（七連星）と稱してゐることは人の知る所である。アイヌ語では、日本の昔と同じくイワンリコツプ即ち六星といふ。眼識の程度で或は六つにも見え或は七つにも見えるのだから、いづれも尤もだ。古風

土記にスバルを七童子に象つたのは、支那の天文學に出たので、日本の古傳や印度傳來の説とは違ふ。スバルの希臘語ブライアデスは航海星の義であり、日本の近世に於てもこの星は航海者に割合によく知れてゐるけれども、乙姫の海宮の入口に迎へに出て来るものとしましては、意義が甚だ不明瞭であると言はねばならぬ。たゞ海に關係があるといふだけでは説明が物足らぬ。たゞ昂の次に畢をもつて來た所は、たしかに支那星學の影響を認むべきであるが、これらの二星座の先驅としては、オリオン^{シリウス}の參なるミツボシも當つてゐない。希臘のアトラス神の七人娘^{アトラスの七人娘}でもいふやうに、何か別の神話なり象徴なりを發見しなければ解釋がつけない。

畢の和名をアケリボシ云ふ。スバルの名の如く古くなく又その名義もよくわからぬ。或はアケリは明ケリで赫々の義であるのか、それらの語源説や名稱考は次稿にゆづるが、よしや日本自然の説話ではないにしても、ブライアデス(航海星)ミヒアデス(雨降星)ミの二星座が浦島傳説にあらはれてくるのは注意しておく必要がある。尤もスバルだけは上古から自然日本人に知れてゐたが、畢の方は普通民間に知れなかつたのだ。(つゞく)

唯永遠のみ無限大を究むるに足るべし。

アーサー ローズ

名前のいろく (三)

天文臺人

星座

地球上に鏤めてある數多くの星も、濱の眞砂の夫れと同じく無秩序に且つ無數にある様に思はれるけれ共、暫く夜の空に親しんで顔なじみになるミ三つ星はいつ迄も三つ並び、ベガス、の四邊形はいつ見ても四邊形をしてゐることを認めるであらう。昔の天文學者は此等の星の配置を下繪にまつて、美しい空想の彩管を奮つて天空上に數多の人や獸や鳥の姿を描き上げた。又立琴を描いたし冠や六分儀の繪もかいた。そうして此等にそれらの名前をつけたのである。かのトレミーが書き残した偉著アルマゲストの四十八星座は其最も古いものである。チホ・ブラへは更に二個の星座を、次でバイエルは十二個の星座を之れに附加した。

ハレイ、フラムスチード、ヘバリウス、ラカイユ等更に誰れ彼れが比例にならつて遂に百以上の星座をつくつたのである即ち或人に云はせるミ、何れも自分の命けた名前がなくては氣が濟まぬ有様になつたことである。従つて個々の星を記すために便宜の方便であつたものが却つて煩瑣まぎらはし